



河野 恵子

先端生命科学専攻2005年3月博士課程修了、博士(生命科学)
現職：名古屋市立大学大学院医学研究科講師

<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/w3med/labo/2seika.dir/index.html>

私 は2000年から2005年まで新領域創成科学研究科先端生命科学専攻で学びました。当時の日本の大学院には珍しく、英語でのポスター発表など研究を遂行する上で実際に役立つ授業が行われていました。また、先生方の研究分野が多様なので、他分野の先生ならではの本質的なご指摘を頂くこともありました。指導教官の大矢禎一先生から研究のオリジナリティがいかに大切かを叩き込んで頂いたことも忘れ難い思い出です。

2005年から2012年まではアメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストンのHarvard Medical School/Dana-Farber Cancer InstituteのDavid Pellman labに留学しました。HarvardやMITを有するボストンは世界中から本気の研究者が集まる場所です。留学前はどちらかという人見知りだった私ですが、研究のメジャーリーグに飛び込んでからはそんな情けないことなど言っていられなくなりました。目の前に無数に散らばっているキラキラした宝石のような研究に興奮を抑えられず、積極的に人との繋がりを作り、毎日のように行われるトップサイエンティストのセミナーにも可能な限り出席して貪るように話を聞きました。そうして優れた研究に触れれば触れるほど、自分の研究者としての適性があまりにも低いことに悩みましたが、ある時、研究は一人でやるものではないのだからできないことは人に助けて頂ければ良いと気づきました。『自分が優秀かどうかは重要ではない。重要なのは問いであり、実験結果だ』そう気づくのと時を同じくして、「一細胞レベルでのwound-healing」という興味深いテーマに出会いました。細胞表面に小さな傷が付くと、その周囲にアクチンや微小管、Rho型GTPaseなどが集結し、細胞質分裂と似たメカニズムでみるみるうちに傷が治されていくのです。私はそのダイナミックなプロセスに夢中になりました。その現象と一緒に面白がってくれたボスのDavidは、常に叱るのも褒めるのも全力という嘘のない姿勢で指導してくれ、今ではサイエンスの世界での父と

呼びたいほどの存在です。

そうして無我夢中で毎日を過ごすうち、6年半があっという間に過ぎ去っていました。ボストン時代の全てを詰め込ん



ボストン時代のPI、David Pellman (右) と。

だ論文は先日受理され、2012年4月からは名古屋市立大学大学院医学研究科にて講師として勤務しています。自分と興味を共有し、共に一喜一憂してくれる学生さん達に支えられながら、毎日好きなだけ研究ができる環境にいられる幸運に感謝しています。今後も、留学中にDavidが繰り返し言ってくれたように、「今できる実験ではなく真に重要な問いに取り組む」ことを忘れず、自分なりのペースで前進しようと思っています。

最後に研究者を目指す後輩の皆さんに私の好きな言葉を送ります。

"Enjoy it. Science is fun."

(Christian de Duve, Nature, 467; S5)

研究者に向いているとはお世辞にも言えない私がこれまで研究を続けてきたのは、ただ楽しかったから。それが全てです。

" Science is fun."